

財団法人松江市教育文化振興事業団

# 埋蔵文化財課年報 XI

平成18年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

## 田原谷遺跡

[所在地] 松江市春日町455-1他

[調査原因・調査面積] 宅地造成（松江市都市開発公社）・1,100㎡

[調査の概要] 本調査地は、県道（城南通り）沿いの田原谷池南側の丘陵に位置する。標高約27mの丘陵上にある南北二つの平坦面とそれをつなぐ痩せ尾根からなる。調査の結果、土坑11基、土器棺墓2基、土壙墓6基、石蓋墓、焼土坑、溝状遺構5条、掘立柱建物跡2棟、ピット群、ピット列を検出した。

### <主な遺構と遺物>

- 土壙墓（SX02）…………… 北部平坦面の北東端で検出した二段掘りの墓壙で、鼓形器台、高坏、甕が出土した。これらの供献土器から古墳時代前期の遺構である。
- 土器棺墓（SK06）…………… 南部平坦面南西端で検出した遺構である。甕・壺・甕の順に3個体の土師器が重なって横倒しの状態で出土し、中央の壺は底が抜けていて、下の甕の口縁が壺の中に入っていた。出土した土器はすべて複合口縁をもつ古墳時代前期の土器である。
- ピット列…………… 南部平坦面の南東側斜面、下端で検出した、7穴連なったピット列である。黄褐色土の上に赤褐色土が円形に堆積していた。ピット周辺に赤土はみられないことから、人為的に埋められたものと考えられる。
- 掘立柱建物跡（SB01）… 南東平坦地で検出した東西2間（3.3m）、南北3間（5.5m）の掘立柱建物跡である。10本の柱穴は楕円形や長円形に掘り込まれていた。建物跡中央東寄りの炭の広がりの下から見つかったピットには、赤色顔料を混ぜたような赤色の土が部分的に入っていた。  
遺構面に密着した遺物はなかったが、覆土から13世紀代中国製の褐釉壺の底部と胴部片、中・近世の土師質土器皿、鉄釘、17世紀初め頃の肥前系の播鉢などが出土した。出土遺物から中・近世の遺構と考えられる。

調査結果から、田原谷遺跡には二つの時期の遺構があることがわかった。ひとつは古墳時代前期であり、もうひとつは中・近世である。古墳時代前期には調査地全体が墓域であり、その後中・近世に両頂部とも削平され、ピット群やピット列、掘立柱建物跡が一体のものとして造営されたと考えられる。この空間は日常生活に関わる遺構ではなく、非日常的な空間として位置づけられるのではないだろうか。

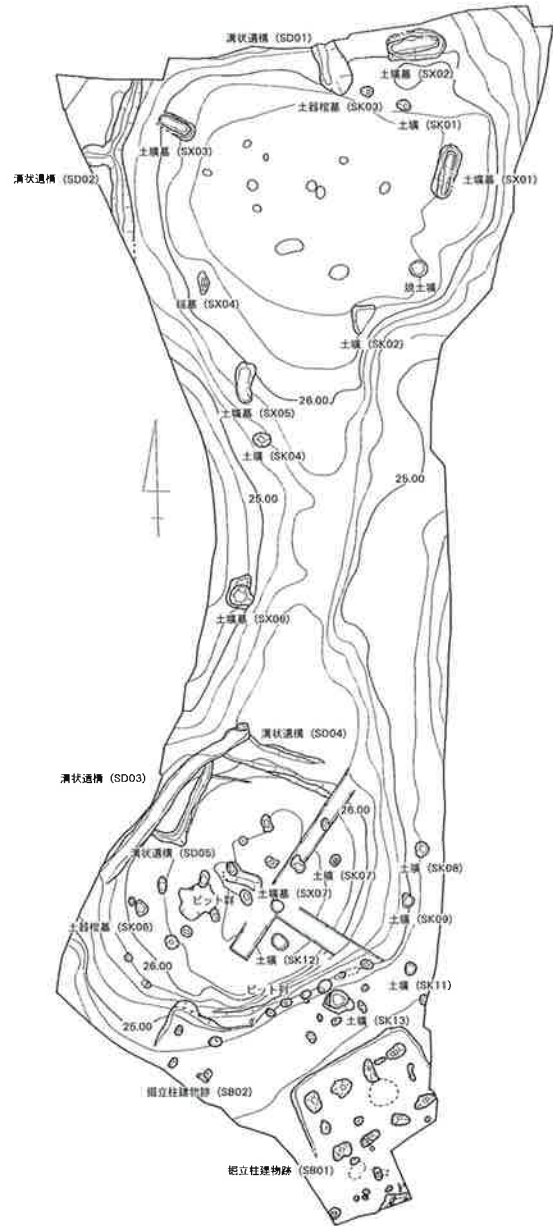
この田原谷には古くは風土記に記載された田原社があり、近世に奥谷に移された田原神社の元宮があったといわれている。（内田 映『法吉村誌』昭和63年）本遺跡の掘立柱建物跡は田原神社元宮を探るうえで、貴重な資料となりうるであろう。（廣濱貴子）



土器棺墓 (SK06、西から)



ピット列土層堆積状況



田原谷遺跡・調査成果図 (1:400)



掘立柱建物跡 (SB01)  
(南西から)

## 西川津遺跡C区・古屋敷Ⅱ遺跡

県道松江島根線西川津工区として松江島根線から国道431号バイパスまでの約9,000m区間の道路延長事業が計画され、松江市教育委員会によって事業区域内的の踏査を実施したところ、周知の遺跡二ヶ所（「西川津遺跡」：A～D地点、「堂頭山城跡」：E地点）の他、山林部分（L～V地点）で遺跡推定地が発見され、新たに「古屋敷Ⅱ遺跡」と命名された。

発掘行政関連での協議の末、このうち平成18年度には財団法人松江市教育文化振興事業団によって西川津遺跡C区と古屋敷Ⅱ遺跡の調査が、19年度以降は島根県（埋蔵文化財センター）が調査を担当実施することとなった。

西川津遺跡C区は県道松江島根線西川津工区のうち、朝酌川のすぐ東側に位置する調査区で東西19m、南北19m、調査面積は約380㎡である。旧表土の下、標高-0.7m前後から砂層が堆積し大量の縄文土器・弥生土器・土師器が出土し、石器や数点の須恵器も出土した。出土状況から調査地は河川が流れた痕跡であり、顕著な遺構は認められなかったが、遺構としては打ち付けられた杭等を確認できた。

古屋敷Ⅱ遺跡の現状は山林であったが、調査当初より工事計画が二転三転し、最終的に当初伐採範囲に3分の2である「中央区」と「東区」との発掘調査を実施した。古屋敷Ⅱ遺跡の東地区は表土直下ですぐ赤土の地山を検出し遺構・遺物はなかった。中央区では10～11世紀前後を主とする土師器・須恵器の包含層と若干の遺構を検出した。（藤原 哲）



西川津遺跡C区 旧河道出土の杭

## 大勝間山城跡

県道松江鹿島線拡幅工事が計画されたため、平成18年11月から平成19年1月にかけて3ヶ月間、発掘調査を実施した。調査面積は250㎡である。

大勝間山城は、松江市鹿島町名分に所在する中世の山城である。尼子方の家臣が残した『雲陽軍実記』や『朝山家系図』の中にその名が見え、築城主や築城時期そして実戦がおこなわれた事まで知ることができる珍しい山城である。文献と考古の両面からアプローチできる、担当者としては非常に興味深い遺跡である。

しかし、この調査区は大きく分けて3時代の複合遺跡であった。最下の遺構は弥生時代中～後期の住居跡であり、その次に中世の山城がある。山城として明確な遺構は確認できなかったが、山頂から土師皿の破片多数が出土したほか火縄銃の弾1点が出土した。その後、この場所は江戸時代の運河佐陀川開削工事の際に採土場そして揚土置場として利用されている。佐陀川開削工事は文献によってよく知られているが、遺構の面から大規模に調査できたのは今回が初めてである。調査区はこのように複雑な状況であったため、協議の結果、平成18年度は調査区の北側約半分についてのみ調査を実施することとなった。

調査の結果、北側半分では、山頂部の浅いレベルから土師皿の破片多数が出土し炭の散乱を確認した。さらに掘り下げると山側に溝を掘った隅丸方形の竪穴建物を検出した。その遺構の南の少しレベルが下がった地点では、円形竪穴建物跡と隅丸方形竪穴建物跡を検出した。隅丸方形竪穴建物跡の中からは土器類が当時そのままのような状況で出土し、弥生時代後期竪穴建物内での器物の配置を知ることができる良好な史料となるだろう。

(江川幸子)



切り合った弥生時代の竪穴建物跡（奥が中期、手前が後期）

## 城下町遺跡（殿町287番地）

本遺跡は松江城の東側、殿町287番地に所在する。本調査は松江市の歴史資料館整備事業に伴うもので、試掘調査を含めて平成17年度から継続している。本年度の調査面積は約900㎡を測る。

松江藩は3度、藩主が代わっている。まず、1600年に堀尾吉晴が月山富田城に入城する。しかし富田城では近世城下町としては不便と考え、07年から11年にかけて松江に城と城下町を建設し、移り住んだ。その後、藩主が堀尾氏から京極氏に代わり、38年に松平直政が藩主として松江城に入り、以来10代230年間にわたって松平氏が支配し、明治維新を迎えた。

本調査地は江戸時代を通じて松江藩内のNo.2ないしNo.3の家老が配置されており、大変重要な位置であったことが伺える。堀尾時代は「堀尾采女」（4,000石）が、京極時代は「佐々九郎兵衛」（10,000石）が、松平時代は「乙部九郎兵衛」（4,250石）が住んでいたことが絵図等で明らかになっている。

発掘調査の結果、検出された遺構は大きく分けて4つの時期（Ⅰ～Ⅳ期）に分けられる。代表的な遺構をいくつか紹介する。

【Ⅰ期】は城下町建設以前の湿地帯の土であったと思われる黒色粘質土の上に、地山のブロックを多く含んだ黄色～黄橙色土を盛土して遺構を作っている。

SX-18は調査地の南側で並ぶように検出された建築部材を転用して作った木枠遺構である。規模は長辺200～300cm×短辺90cmを測る。板材を斜めに内側に入り込むように据え付け、その内側に杭を打ち込んで板材を支えていた。埋土からは手づくね成形の土師質土器や胎土目の跡が残る肥前陶磁、漆器などが出土した。

【Ⅱ～Ⅲ期】の遺構は時期の特定には至らなかったが、検出状況から2時期あると考えている。

SX-07は調査区の南西側から検出された石列である。主軸部分は東西方向に走り、長さ約11m、幅約1m、高さは最も石が積み上げられたところで70cmを測る。東側は石が2～4段積み上げられているが、西側に行くにつれて低く雑に積み上げられている。また西端から派生して南側にも石列が2条検出されている。SX-08は調査区の中央南から検出された石組みの遺構である。内法は110×150cm、深さ85cmを測る。石は3段から4段積まれており、さらに内側にはステップ状に石が積まれていた。用途は最下層の堆積土が砂質土であったことから、水に関係することに使われていたのではないかと考えている。この段階の遺物は土師質土器や肥前陶器に加えて肥前磁器も多く出土するようになる。

【Ⅳ期】は幕末から明治以降に作られた遺構群で、明確な建物跡を示すような遺構は少なく、攪乱や廃棄土杭が多かった。この時期になると他地域の搬入品が少なくなり、代わって在地の陶磁器類（陶器：布志名焼、磁器：意東焼・塩谷焼）が大半を占めるようになる。

このように各時期にわたって多くの陶磁器類が出土していることに加えて、Ⅰ～Ⅲ期の遺構からは多くの木製品も出土している。文献資料ではわかりにくい当時の生活の様相の一端が垣間見ることができる。今後調査区域が南・西側に拡大することから、より多くの情報が得られることが期待できる。

（石川 崇）



SX-08 完掘状況



SX-18 検出状況

## 城下町遺跡（寺本宅跡・だるま堂跡・須田、吉田宅跡地）

市道北公園線拡幅工事が計画されたため、平成18年8月から10月にかけて3ヶ月間、通称大手前線沿いの互いに離れた3ヶ所について発掘調査を実施した。調査面積は、寺本宅跡地が60㎡、だるま堂跡地が102㎡、須田、吉田宅跡地が160㎡である。

松江城は中世には末次城があった場所で、末次城の周囲は宍道湖が奥深くまで入り込んで湿地域や湖が広がっており自然の要害となっていた。江戸時代に堀尾氏が松江に配されて松江城を現在の地に構えるにあたり、湿地や湖を埋め立てて城下町を造成して現在の松江の基礎ができあがったのである。

3ヶ所を調査する際に主眼を置いたことは、①城下町造成遺構、②武家屋敷遺構、③江戸時代から使用され続けている道路側溝の地下構造の解明等である。

中でも①については非常に興味深い成果を得ることができた。だるま堂跡地では、おもかす層（湿地の藻等が腐りきれずに残る層）上に大海崎石が一部規則的にならべられ、場所によっては単独でも配されていた。これらは造成土が無駄に広がるのを止め、区画ごとに土をつき固めたものと考えられる。また須田、吉田宅跡地では、灰色粘質土上にウラジロ（シダ）を敷き詰めた遺構を検出した。このウラジロ敷の効果は大きく、図面作成作業の際にここへ足をのせると沈むことなく自由に動くことができたのである。身をもってその効果を実感することができた。調査範囲は3ヶ所とも非常に狭かったが、表面では見られない造成工事の苦勞の一端をかいま見ることができたように思う。

（江川幸子）



須田、吉田宅跡地で検出したウラジロ敷遺構



## 団原Ⅱ遺跡

団原Ⅱ遺跡は、松江市大庭町字團原に所在する。

団原という字名は奈良時代の意宇軍団に由来するともいわれ、それは『出雲国風土記』の記載とも合致している。この遺跡の東方には出雲国国庁跡があるほか周囲には風土記時代の遺跡が数多く存在しており、調査地はまさにその時代のメッカと言っても過言ではない。

ここに、個人によるアパート建設の計画がたてられたため、松江市教育委員会が試掘調査をおこなった。その結果、ピット少々と須恵器片の出土を確認したため、当事業団が平成18年6月1日から同年7月31日まで約2ヶ月間をかけて本調査を実施した。調査面積は927㎡である。

調査地の地形は緩やかに傾斜していたが、実際に掘ってみると、地山斜面がカットされて平坦面が造られていた。カットされた地山面直上からは19世紀末頃の陶磁器が多く出土した。そしてカットされた地山の上には軟らかいクロボク層が1m以上載っていた。また、東端部からは天井部を失った芋穴（近世の貯蔵穴）2基や、性格不明の土壌多数、ピット等を多数検出した。

地権者の「曾祖父あたりが大規模に長芋を作って広瀬まで売りに行っていたんだ。」という話のとおり、検出された遺構はまさに江戸時代末期の穏やかな農村の一角といった状況であった。しかし、遺構を個別に見ると性格不明なものが多かった。今後の調査例の増加や文献、民俗など考古学以外からのアプローチにより、近世農村の復原がもっと具体的にできれば有意義な調査結果となるであろう。

今回は風土記時代の遺構は検出できなかったが、それは江戸時代末期に大きく地山加工がおこなわれていたためかもしれない。少量の須恵器片も出土しているため、遺構が存在した可能性は否定できない。

(江川幸子)

## 鶉灘山遺跡ほか

昨年度に引き続き実施した、松江市立鹿島中学校の校地拡大および改築に伴う発掘調査である。調査地は急峻な崖で、調査面積は60㎡を測る。

場所は松江市鹿島町名分であるが、今年度発掘調査を実施した大勝間山城跡調査区と同じ山で、北東にわずか50m離れた地点である。調査は、平成18年2月の約7日間実施した。

結果としては、昨年度検出した段状遺構の続きを検出したのみで、新しい遺構、遺物ともに発見することはできなかった。

(江川幸子)

## 岩汐窯跡

本遺跡は松江市街地北東の松江市大井町の丘陵谷部に位置し、その一帯は大井窯跡群として多くの須恵器窯が周知されているところである。

調査は溜池整備事業（岩汐池）に伴い工事の掘削範囲及び、溜池整備後の常時貯水面の高さ17.57mまでの範囲を対象とし、平成18年10月20日から平成19年3月23日の間行なった。面的調査の範囲は2,500㎡を測る。開発範囲の近くには古くから岩汐窯跡の存在が知られ、本調査においてはその窯跡に付随する遺構及び遺物の検出が見込まれた。

調査の結果、須恵器窯3窯（仮称：A窯・B窯・C窯）、須恵器片・窯体塊等の集積地1所（SX01）、大きな窯体塊の範囲1所、須恵器片を多量に含む帯状の黒色土1条、大木・大形の石・円形状の小石列1所等と、コンテナ300箱に及ぶ須恵器片を確認している。

なお、A窯・B窯は調査対象範囲外であり発掘調査はできなかったが、記録として露出した断面を実測することができている。（A窯は周知名称の岩汐1号窯・B窯は周知名称の岩汐2号窯と推測される。C窯は本調査で確認した新たな窯跡である。）

### 〔A窯・B窯・C窯〕

A窯は調査区東側の北側急斜面に断面が露出していた須恵器窯である。残存箇所における窯体幅は2.55m、深さは1.15mを測る。

B窯はA窯から西の方向へ約2m平行移動した崖状の急斜面に位置するものである。残存する窯体幅は2.85m、深さは0.75mを測る。A窯と同様、焼成部の半ばで分断され崩落していた。

C窯は調査区最西部の谷奥のトレンチで確認した須恵器窯である。残存幅は約1m弱を測り、A窯・B窯と同斜面に造られている。このC窯からは6世紀末～7世紀初頭の須恵器坏蓋・坏身片が出土している。

※A窯・B窯の詳細については、本年報の[コラム]を参照。

### 〔SX01〕

須恵器片・窯体塊等の集積地であるSX01は溜池の中心部からやや東寄りの底面に位置し、水が抜けた状態で初めて顕わになったものである。規模は東西約15m、南北5～6mを測り、中央を頂上部とした山のような形状を成していた。表面は一面須恵器の破片で覆われており、「土器の山」と呼ぶのに相応しい程のおびただしい量の須恵器が見てとれるものであった。

このSX01は遺構としての視点では検討困難である為、遺物を中心に見ざるを得ないものであった。出土した大量の須恵器の時期幅は6世紀前半～7世紀初頭に集約されるもので、当該期が岩汐池の須恵器窯が操業されていた時期と考えられる。また、特筆すべきは須恵器と共に大量に出土した窯体塊である。現在は削平されており旧地形は想像の域を出ないが、仮に削平された部分に窯が存在していたとしたら、削られる際に破壊され、その窯壁片が辺り一体に散布していても不思議ではない。そう考えた場合、SX01は溜池造成時に人々の手によって掻き集められた、現存しない窯の灰原と考えるのが妥当であると思われる。

岩汐窯跡は、大井古窯跡群の中でも大規模な窯跡として周知のところではあったが、実際に調査が行なわれたのは今回が初のことであった。溜池の水を抜いたことによりSX01という須恵器の山が現れ、その年代は6世紀末～7世紀初頭代を示した。また調査範囲外ではあったが、A窯（岩汐1号窯）・B窯（岩汐2号窯）の断面実測を行い、加えてC窯という新たな窯の存在を確認することができた。

今回、6～8世紀代に大井古窯跡群の中心を担っていたと思われる岩汐窯跡を調査し、3つの窯、そしてコンテナ300箱におよぶ膨大な量の須恵器・窯体塊を検出した。これらの成果は、岩汐窯の須恵器製作・搬出・流通等の規模の大きさを手がかりとなり、また現時点では発掘調査された窯跡が少ない大井古窯跡群の全貌を明らかにする上で、非常に重要で且つ好資料となり得るものとする。

（秦 愛子・落合昭久）



調査前 全景（中央左に見える小山がSX01）



SX01 堆積土状況

## 石の堂遺跡

本遺跡は宍道湖北岸、松江市岡本町地内に所在する。宍道湖に向かって伸びる低丘陵に挟まれている小さな谷部に位置し、本遺跡調査範囲の北西側には「石ノ堂池」と称される農業用水の溜池が造成されている。

調査は溜池整備工事内の遺物包含層を有する溜池南東側の旧水田地約280㎡範囲において、面的調査とトレンチ調査を併用し行なった。

調査の結果、明らかな遺構を検出することはできなかったが、現地表面より1 m程掘り下げたところから遺物包含層と、この層の下位に遺物を包含する自然流路の痕跡を確認することができた。

遺物包含層においては、土師器、須恵器等が多量に出土しており、そのほとんどが平安時代の遺物であった。このうち、土師器は大半が坏で、底部径が小さく、回転糸切り痕を残し、体部は浅いものが多く見られた。また、須恵器は無高台で体部は湾曲せず直線的に延びる形態の坏が多く見られる。

自然流路跡の堆積土からは、IV-1様式とみられる弥生土器の甕・底部片と黒曜石剥片が1点ずつ出土している。この自然流路跡は南北方向に流れていたことが分かるもので、弥生時代中期頃には土器等を含みながら宍道湖に水を注いだ小さな川であったと想像でき得る。

本遺跡の低丘陵と並行し、宍道湖側へ伸びる東側の丘陵上には、数多くの遺跡・古墳が存在するが、本遺跡周辺での周知の遺跡は皆無に等しい。今回の調査では、明確な遺構を検出・特定するには至らなかったが、8～12世紀代の多量の土師器、須恵器、そして弥生期に存在していた自然流路跡を検出している。明確な遺跡が確認されていないこの丘陵で、弥生土器をはじめ多量の遺物を発見できたことは意義深いことであり、また大きな成果となったと言える。今後、本遺跡を含む低丘陵に遺構の存在が確認され、その詳細が明らかになることを期待する。

(秦 愛子・落合昭久)



出土した須恵器



出土した土師器

## 新宮遺跡

本遺跡は松江市岡本町地内の宍道湖北岸の南北方向に派生する低丘陵の南東側裾部に位置し、同丘陵の尾根部には「崎山古墳群」「狐松古墳」など古墳の存在が知られている。調査地北西側には「廻田池」と称される溜池が隣接しており、現在畑地となっている調査区及びその周辺は、旧秋鹿小学校の敷地であったことが知られる。

調査は畑地として使用されていた溜池の南東側の約288㎡を平成18年6月～7月の40日間を要して行った。

調査の結果、明確な遺構を検出することはできなかったが、現地表面より約1m掘り下げたところから、遺物包含層とその下位に遺物を包含する自然流路跡を検出した。

このうち、遺物包含層は多量の土器を含む粘質層で、出土する遺物のそのほとんどは平安時代の土師器・須恵器であった。土師器は平安時代～中世と思われる坏・高台付坏・甕片・土錘等が出土しており、坏においては底部径が小さいもの、糸切り痕を残すものが比較的多く見られた。須恵器は奈良～平安時代の甕・壺・高坏・坏・高台付坏・蓋等の破片が多量に出土している。その他、遺物包含層の下位で検出した自然流路のからは古墳時代前期の複合口縁の甕片3点、弥生土器の底部片1点が出土している。

今回の調査では人為的な遺構は確認できなかったが、8～12世紀代の多くの遺物を有する遺物包含層と、この下位にて弥生時代～古墳時代の自然流路跡を確認することができた。これらの遺物・自然遺構の検出は、本遺跡の程近くに住居跡等の遺構がある、もしくはあった可能性をより確かなものとし、周辺の古墳・古墳群との関連性、また岡本町一帯の弥生時代以降の様相を知る上で、有効な資料になり得たものと考えられる。

(秦 愛子・落合昭久)



調査状況

## 平成19年度調査概要報告 乃木西廻遺跡

### I. 周辺の歴史的環境と調査に至る経緯

乃木西廻遺跡は、上乃木4丁目2008番地及び2010番地に所在している。遺構検出面の標高は、13m～16mの低丘陵地で、地元では、この遺跡を含む広い範囲を「丸山」と呼んでいる。周辺には、北に「経塚古墳」東に「向荒神古墳」西南に「下沢遺跡」「乃木二子塚」などの遺跡がある。『乃木郷土誌』（平成3年9月1日 松江市乃木公民館発行）によれば、明治9年の『意宇郡村誌 乃木村』の条に「丸山」の東の「当貫」の地に新たに「劫増寺」という時宗の寺が所在することが記録に見えている。地元の話では、この寺はもともと丸山に在ったものを「当貫」に移設したとのことである。

発掘調査地は、現況は畑であるが、この地に宅地造成が計画されたことから松江市教育委員会文化財課で9カ所のトレンチを設定し試掘調査を実施した。その結果、一部のトレンチで柱穴と見られるピットや2段に掘り込んだ土壌が検出されたことから急速本調査を実施することになった。総調査面積は約400㎡。調査期間は、平成19年4月23日～同年5月28日までである。

### II. 各遺構の概要

#### 【主な遺構】

●SI-01 かなり削平を受けているが、推定5.5m×5.5mの隅丸方形の竪穴住居跡。床周囲に幅約14cm、深さ約6cmのVの字周溝を掘り込んでいる。4本の支柱穴と1つの中央ピットからなる。柱間は中心で2.6～3.0mを計る。支柱穴は、直径38cm～50cmで、深さは西側のピットで56～66cm、東側で26～40cmを計る。中央ピットは、住居中央から東に寄っていて、堆積土中にかなり炭を含んでいた。また、ピット検出面の上に炭が5～6cmほど堆積していた。住居内周溝は、北側で検出できない箇所があった。また、住居跡の北側に平行するように外に2つのピットがあった。2つとも検出面で直径約50cmあったが、深さ15cmと浅く遺物は出土しなかった。住居跡との位置関係からこの住居跡と関連する可能性も考えられる。この住居跡からの遺物出土量は非常に少なかったが、低脚坏2個体（脚部のみ）、複合口縁の口縁部や壺か甕の胴部と思われる小片が出土している。これらの遺物からSI-01は、古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

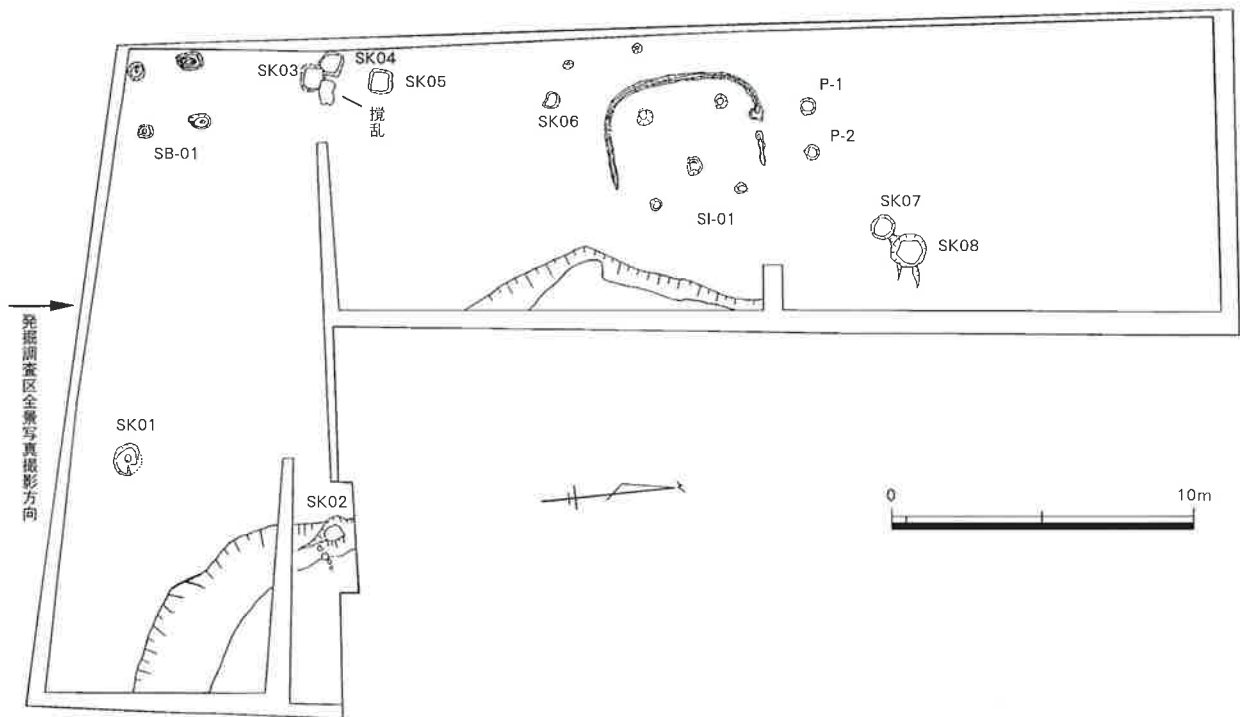
●SB-01 A1区の西側で直径約60cmの4つのピットを検出した。ピットの深さは、浅いもので20cm、深いもので68cmを測る。柱間は中心で、南北約1.8mと1.7m、東西で2.06mを測る。埋土に柱痕跡の残るものもあり掘立柱建物等の一部である可能性が高い。ピット中の埋土より弥生中期と思われる土器の口縁部が出土している。

●SK01 試掘により検出され本調査された土坑。13C代の中国製褐釉四耳壺が多量の土師器皿等とともに出土した。この土坑の詳細については、別に記述する。

●SK02 斜面に丸く掘り込んだ土坑。土坑内から、近代の瓦片や19C代の陶器片や手あぶりなどが出土している。手あぶりの中には、2cmぐらいの厚みで均一に灰が残され、割れた播鉢底部や陶器片が入っていた。丁寧に掘り込んであるが、19C以降の廃棄土坑と考えられる。



発掘調査区全景



第1図 発掘調査成果図

●SK03 一辺80cmの方形土壇。深さは1.1mあり、底部は一辺64cmを計る。また、側壁も底部も平らに整形されている。19C代の陶磁器片や鉄釘（角）が出土している。出土遺物や内部の堆積土層から座棺墓壇と考えられる。

●SK04 SK03と同様に一辺80cmの方形に掘込んだ土壇。深さ46cmと浅く、SK03の半分以下の深さである。底部は一辺66cmを測り平らに掘られている。検出状況からSK03より古いと考えられる。土坑内から、土師器皿や角釘等が出土している。出土遺物から座棺墓壇と考えられる。

●SK05 一辺72cmの方形の土坑。底は平らで一辺60cmを測る。深さは、30cmしかなかった。土師器皿が伏せた形で底に密着して出土している。検出状況からSK04と同時期の可能性が高い。

●SK06 菱形の土坑。検出面で一辺36～50cmを測る。底は平らで一辺30cmを測る。深さは約30cm。遺物は出土していない。

●SK07、SK08 円形の土坑。底も丸く掘られている。陶磁器片、瓦片外多数が無秩序に出土しているので19C以降の廃棄土坑と考えられる。「劫増寺<sup>こそうじ</sup>」との関連が考えられる土坑である。

●P-1, P-2 検出面で直径52cmを測る。浅く、底まで10～14cmしかなかった。ただし、検出面で柱痕跡を確認できた。柱間は、1.5mを測る。遺物はなかった。SI-01に係するピットの可能性もある。

#### （まとめ）

この遺跡の遺構に伴った土器の時代は、弥生中期～古墳時代前期、中世、近代と連続性がなく検出された。また、調査面積約400㎡という広さと周辺環境から考慮すると、比較的遺構の数は少ないと感じられた。しかし、掘立柱建物跡（SB01）や竪穴住居跡（SI01）が検出されたことは、この遺跡の所在する地形を考える上で大きな意義があった。なぜなら、乃木西廻遺跡は、「丸山」丘陵の東辺に位置していることから、丘陵の更に中央部である本遺跡の西側に、弥生中期～古墳時代にかけての集落跡の存在する可能性が示唆されるからである。

なお、それ以降の遺物は、13世紀代にとぶ。このSK01の性格は非常にわかりにくいだが、中国製褐釉四耳壺内の埋土を蛍光X線分析した結果、骨蔵器ではないことが判明している。

その他、各調査区で土坑が検出されたが、四角い堀形をするものは、座棺を納めた19世紀代の墓壇であり、円形の場合は近代の廃棄土坑と考えられる。廃棄土坑は、当時この場所にあった『丸山山<sup>まるやまさん</sup>劫増寺<sup>こそうじ</sup>』移転の際に、壊れたものを廃棄した土坑である可能性が考えられる。ただし、四角い堀形をするSK03とSK04は、切り合って穿った座棺墓で、SK03が深くSK04が非常に浅いことからSK04を穿った後、削平を受けその後SK03を掘り込んだと考えられる。したがってその時点で、斜面に掘り込んだSK02や近代の遺物を検出したSK07、08などの土坑以外は、かなりの削平を受け遺構面が失われたと考えることができる。

（錦織 慶樹）



SK01について（第2～5図） 調査地の標高14.8～15.2mを測る東向きの斜面で検出された平面円形を呈する土坑である。試掘調査に壁面と底部の一部を消失しているが、現況での規模は上縁径104cm、深さ最大47.7cmである。土坑底部は中央に向かって若干の傾斜がついており、中央には上縁径21cm、深さ最大19.5cmを測る小ピットが掘り込まれていた。遺物は土坑の底部から土師器碗10点・皿62点・鍋1点が出土しており、底部中央の小ピット内からは中国製褐釉陶器1点が出土している。

第5図1～45は土師器皿である。同形態であることから62個出土したもののうち45個を掲載した。重機により土坑の一部が掘削されていることを考えると、もう少し多い数の皿が埋納されていたと考えられる。いずれも平面は歪な円形であり、外面底部中央は窪んで上げ底気味となっている。調整は口縁部内外面が横ナデ、体部外面下半はナデ仕上げで所々に指頭圧痕が残る。焼成は悪く、水洗い時に溶け出すようなものであった。出土状況は、大部分が口縁部を上にした状態で出土しているが、裏向きに置かれているものもあった（第4図参照）。また、多いところでは3枚の皿が重ねられた状態で出土している。法量は口径8.4cm・器高1.8cm前後を測るものである。時期は13世紀と考えられ、市内の石台遺跡からも同様の皿が出土している。

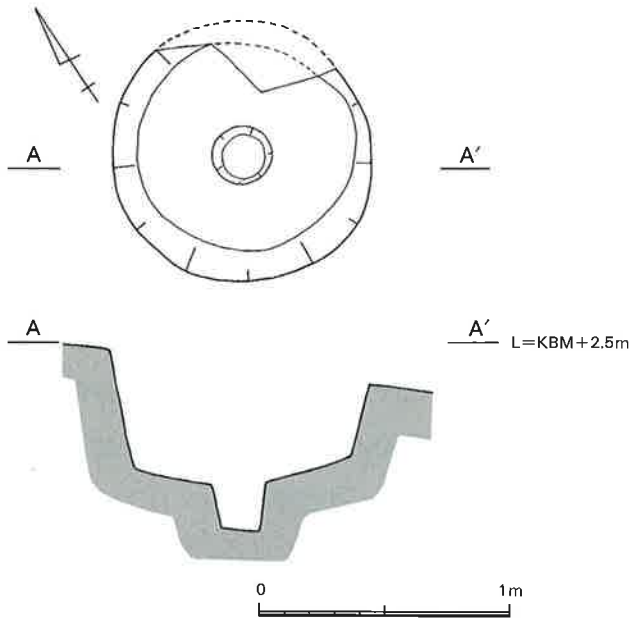
第5図46～55は土師器の碗である。調整は口縁部内外面が横ナデであり、底部内外面にはナデ調整が施され所々に指頭圧痕が残る。法量は口径12.8～13.4cm、器高3.3～3.8cm、底径7.0～7.5cmを測る。京都Gタイプに含まれるものであり、13世紀のものと考えられる。

第5図56は土師器の鍋である。平底気味の底部から体部は急角度に立ち上がり、口縁部は「く」の字に屈曲し真っ直ぐに伸びる。調整は体部内外面にハケ目が施されており、使用したものを埋納したようで、底部を中心に煤が付着している。口径34.4cm、器高14.3cmを測る。

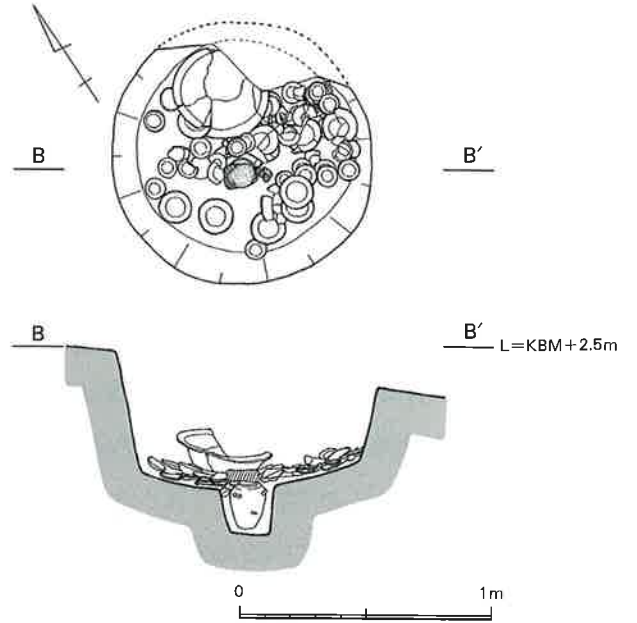
第5図57は中国製褐釉陶器の四耳壺である。土坑中央の小ピット内から自然石で蓋をした状態で出土している。底部に低い高台をもち、体部は緩やかに立ち上がり胴部中段付近に最大径をもち、頸部は胴部上半から緩やかに窄まり、上端で屈曲して短い口縁がつづく。内外面に白っぽい釉が極めて薄くかかり、外面は無造作に灰褐色の釉を掛け流している。法量は口径9.0cm、底径7.2cm、器高21.7cmを測る。VI-2類に含まれるものであり、13世紀のものと考えられる。

今回検出された土坑は墓壙、経塚、地鎮などの祭祀遺構といった性格が考えられる。四耳壺内部の1/3程度には粘土が堆積しており、土の水洗いを行ったが何も検出されなかった。また、蛍光X線分析で四耳壺内部の土と外部の土を比較対照したが、検出された元素は鉄(Fe)、マンガン(Mn)、チタン(Ti)であり、何れも人骨に相当すると考えられる成分は検出されなかった。現時点では性格不明の遺構といわざるを得ない。時期は出土した遺物から13世紀代に作られたものと考えられる。

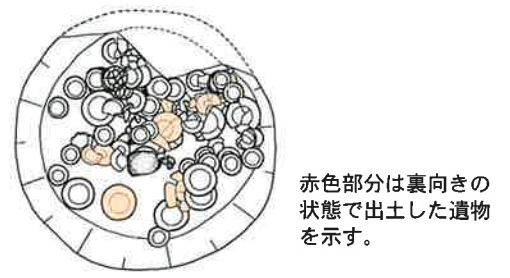
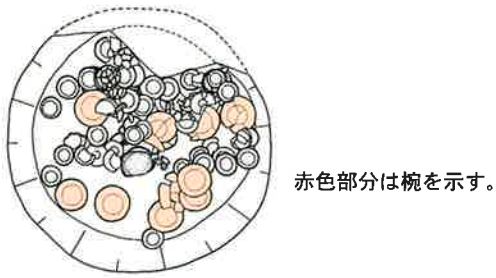
（松江市教育委員会 文化財課 川上 昭一）



第2図 SK01実測図 (S = 1/30)



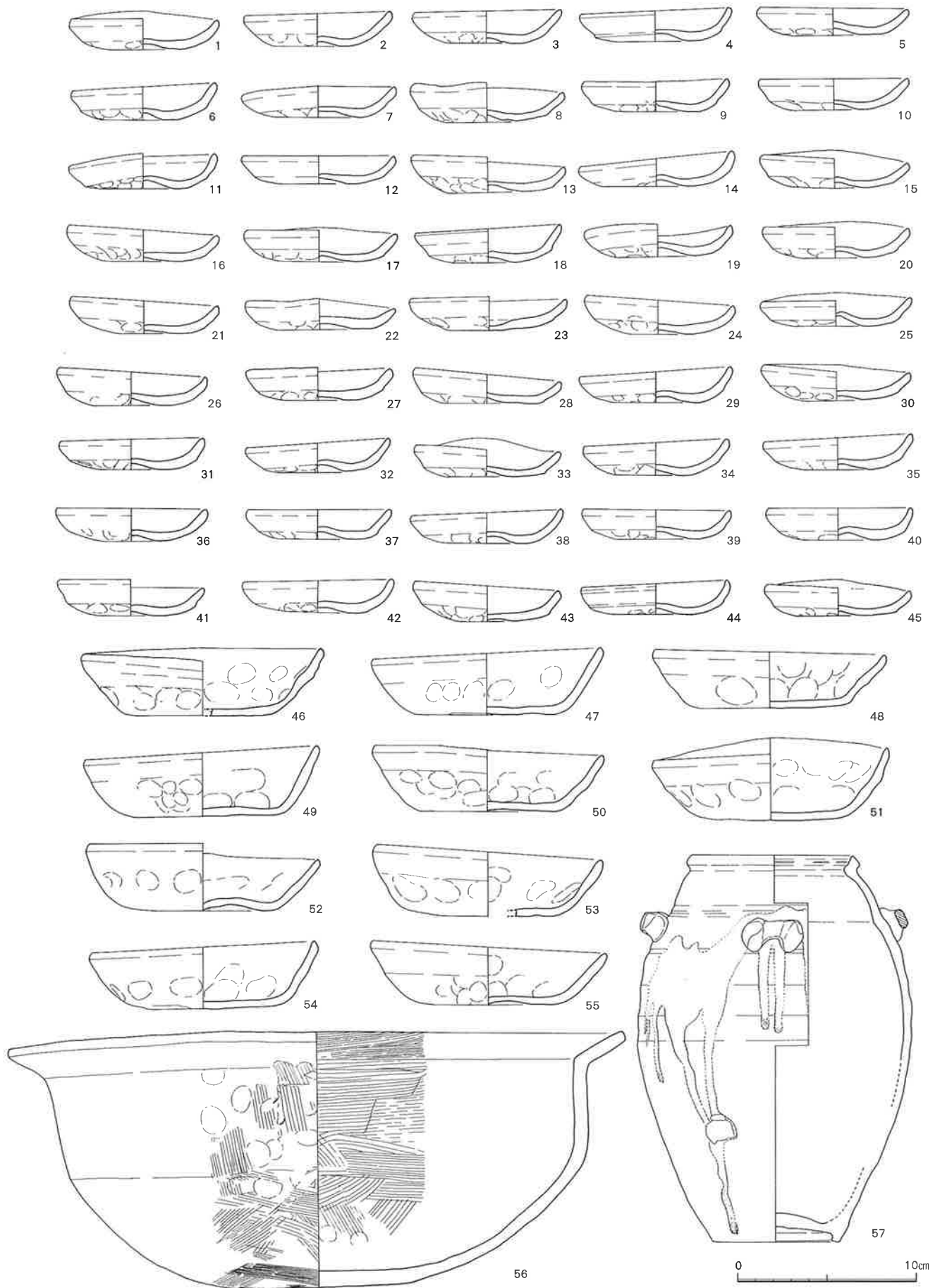
第3図 SK01遺物出土状況実測図 (S = 1/30)



第4図 土師器碗・皿出土状況実測図



SK01遺物出土状況写真



第5図 SK01出土遺物実測図



SK01調査後全景



SK01出土遺物写真

[註] 註1 高槻市教育委員会橋本久和氏のご教示による。

註2 高槻市教育委員会橋本久和氏のご教示による。中世土器研究会編「概説中世の土器・陶磁器」真陽社では、14世紀と記載してあるが、現在では13世紀の古い時期と考えられている。但し、これは京都近郊の編年になるため、周辺地域ではこれよりも時代が下るかもしれない。

註3 大宰府条坊跡XV 陶磁器の分類編 2000年 太宰府市教育委員会

註4 四耳個内部の土の取上げと水洗いについては島根県埋蔵文化財センター澤田正明氏にご協力いただいた。

註5 島根県埋蔵文化財調査センター柴崎晶子氏及び奈良大学保存科学研究室西山要一教授にご協力いただいた。  
柴崎晶子『乃木西廻遺跡出土四耳壺内部の土と外部の土の蛍光X線分析結果について』2006年6月